連載

サンダル履き気ままの旅 11

◇マカオ◇

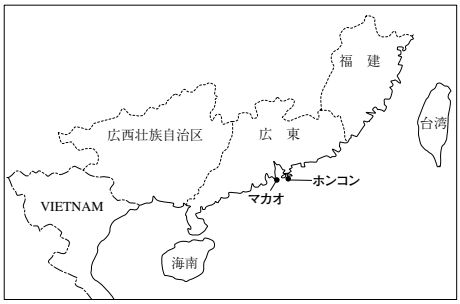
寺井 融
Terai Toru

香港から高速船で1時間 大陸と一線画す入境手続き

この春、急にマカオ行きを思い立った。香港経由である。香港のランタオ島にある香港国際空港は、いつ降り立っても気持ちがいい。到着ロビーをまっすぐ出ると、市内への鉄道のプラットホームとなる。九龍半島を通って香港島に入り、終点の中環で降りた。

タクシーで、上環のフェリーに乗り場に行き、高速船でマカオに向かう（ほかに、九龍半島の尖沙咀からも、高速船が出ている）。乗船したら、すぐ放送があった。シートベルトを着用してほしい、とのこと。ベルトを締め、お茶を所望して、ゆっくり海を眺めていると、マカオに近づく。所要時間は1時間である。

マカオに入るには、香港とは別の入境手続きが必要となる。手続きは在マカオ、在香港、在本土、外国人と分かれる。一九九九年にポルトガルから中国へ祖国復帰しても、それ以前と同様の出入国（正しくは出入境）方法である。いまだ大陸と一線を画した特別行政区なのである。人口は、約五十万であるという。



ポルトガル風の学校や墓地 30もある世界遺産

かつて陸路で、中国広東省の珠海市に行ったことがある。

「旧植民地と経済特区の間には、『国境』がある。マカオ側の『出入国管理事務所』を出ると、巨大な免税店があった。大陸側に入ると二階の公安事

ヨーロッパ風の街並

小鳥を見る昆明市民（花鳥市場の路地で）

務所にいって、百ＨＫＤ払って、『入境証』を手に入れる。ヴィザである。大陸側の拱北口岸に入った。大陸側とはいうものの、特段変わったことはない。ただ、タクシーに乗ると、アルミ格子があって、運転席とセパレートされているのは驚いた。それだけ強盗が多いということであろう」と、拙著（『サンダル履き週末旅行』竹内書店新社）で、感想を述べている。

なお、マカオの通貨は、パタカ（Ｐｔｓ）。だが、どこでも香港ドル（ＨＫＤ）が通用する。ちなみに一ＨＫＤは約十五円である（二〇〇九・六・一現在）。

今回のホテルは、中心部にあるロイヤルホテル（皇都飯店）。二泊する。目の前がバスコダ・ガマ公園である。近くには魚や野菜、肉を売る市場もあり、庶民的な町だ。

しかも、映画のセットみたいな片面だけ建っている聖ポール天主堂跡から、セナド広場にかけての観光スポットまで、歩いて三十分以内のところにある。

その途中には、ポルトガル風の学校や墓地があり、ここがアジアかと思えるほどあかぬけた一郭もある。墓地には、生前の写真が描かれた墓もあった。

マカオには、世界遺産が三十もある。教会や洋館が立ち並ぶブロックがあって、ハッとさせられるのである。逆に、大陸中国と長く分離していたため、中国以上に中国らしい地域もあった。

天主堂跡と階段広場

気軽に楽しめる中国茶 マカオ風ポルトガル料理も

セナド広場から海側の路地に入ると、骨董品屋が多い通りがある。店々を冷やかしていると、路地の奥に、テントの屋根だけつけたコーヒー屋台があった。コーヒーを注文する。丁寧に豆をひき、水にもこだわっていて、静かに淹れてくれる。この数分の間がよい。出された一杯を一口すする。コーヒーの香りが、ぶあっと拡がる。まわりでは、老人たちが大きなパイで、チー、ポンをやっている。青空麻雀場である。この空間と、コーヒーの味が気に入っていたのだが、その後、いくら探しても見つからない。

市政庁前の通りを海岸に向かって六、七分下ると、右手が文化会館だ。芸術品や茶道具などの店である。入ったら、三階まで上がる。本格的な中国茶を飲ませてくれる喫茶店がある。美人店員指導のもと、凍頂烏龍でも、黄金桂でも、高級茶葉を存分に楽しんだらよい。当方は、庶民的な鉄観音を頼んだ。飲み残した茶葉は、お土産にしてくれる。市内には、醉茶居ほか、気軽に中国茶を楽しめる店がたくさんある。

料理は、国際都市だけに何でもある。お薦めは、マカオ風にアレンジされたポルトガル料理である。有名なのは、アフリカン・チキン。ケンターキッキーフライドチキンを思い浮かべたらよい。スパイスが独特で癖が少なく、ほのかな甘みもあって、卓に置かれていると、次々と手が伸びる。

渡り蟹のカレー、イワシのグリルなども、マカオ風ポルトガル料理の定番で、それらと青葉とジャガイモのスープなどを頼み、赤ワインを飲むというところが、オーソドックスなコースである。

安く美味く雰囲気のいい店 世田谷区の二分の一の広さ

今回の旅での収穫は、低く紅い建物が連なる福隆新街（紅窓街＝旧娼婦街）の中ほどにあるポル

トガル料理店・福龍である。

客は、地元の人がほとんど。観光客などが来ることはまずない。海老のから揚げニンニクライス添え、オックステールの赤ワイン煮などを頼んだ。どちらも素朴な味がして、赤ワインが進んだ。特に、赤ワイン煮のスープはコクがあって、ご飯があったら、かけて食べたい、ハヤシラシスみたいな味がするだろう。パンで皿をぬぐって食べほした。

砦の上からマカオ港をのぞむ

公園で太極拳をする人々

赤のグラスワインをいれて、二人で二百HDKちょっとである。安い、うまい、雰囲気がいいと、三拍子揃った店であった。

暑い時間帯だけ、ホテルで昼寝をむさぼり、後はただただ歩く。香港ほど車が走っているわけではなく、ざわついてもいない。世田谷区の約二分の一の広さである。マカオ博物館があるモンテの砦や、南欧風の教会（世界一の教会密集地）など、心ゆくまで見まくる。「欧州と中国が背中合わせの特別行政区」と言われる所以を、実感した。

有名なカジノに群がる客 ドッグレースで単勝当てる

マカオの夜は、カジノが有名だ。一軒をのぞいてみた。郊外パチンコ屋の何倍ものスロットマシーンが並んでいた。カード台やルーレットにも客が群がっている。『深夜特急』の沢木耕太郎は、カジノに挑戦しているが、博才がないと自覚している当方は、手を染めなかった。見るだけで済ます。

その代わりというわけでもないが、ドッグレース場に行った。グレートハウンド犬が調教師に連れられて入場する。背番号、いや腹から巻いているから胴体番号がついている。1—3とか4—6とか連勝複式もあれば、もちろん単勝もある。足がすらっとしていて、精悍な顔つきの3番を単勝で押さえ、百HDK一枚を求めた。

犬がゲートイン。すぐに号砲が鳴った。各犬一斉にスタート。

「それ行け」

「負けるな」

ついつい、大きな声が出てしまう。そのかいもあってか、③をつけた黒のわが犬が、一番でゴールした。

「ヤッター」

叫んではみたけれど、本命だったらしく、二百六十HKDになっただけであった。それにしても、競馬も競輪も競艇もやらない身にとって、ビギナーズラック。望外のひとときだった。

帰りに、香港で一泊する。好きな飲茶の蓮香樓だけではなく、高級中華店にでも繰り出してみますか。にわかギャンブラーの意気は高い。

■てらいとおる　昭和22年北海道生まれ。46年、中大法卒。雑誌編集者、新聞記者を経て現在、尚美学園大学非常勤講師、ロングステイ財団広報委員、日本旅行作家協会会員。『サンダル履き週末旅行』（竹内書店新社）をはじめとする旅行記のほか、エッセイ『裏方物語』（時評社）がある。